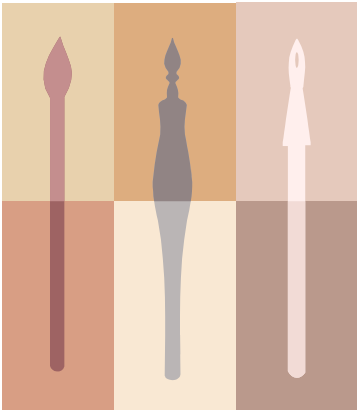
ニューイングランド大学生

日本語
エッセイ・コンテスト 2009

「日米の未来」



Japanese Language Essay Contest for
New England College Students

Sponsored by
The Consulate General of Japan in Boston

今回で三回目となりますニューイングランド大学生日本語エッセイ・コンテストは、ニューイングランド地域で日本語を学習する大学生に、日頃の学習成果の発表の場を提供するとともに、これら日本語学習者に、日本についてより一層知っていただくことを目的として実施いたしました。

今回は、マサチューセッツ州、メイン州等六大学からの参加を得ました。今回のテーマは、オバマ新政権が発足した今年、日本と米国の将来について考えていただこうという意味で、「日米の未来」といたしましたが、いずれのエッセイも、ニューイングランドの特色や環境問題、自らの日本との交流体験等に基づく、ユニークかつレベルの高い作品が多かったと思います。

これら入賞作品を顕彰するとともに、本エッセイ・コンテストにつき日本語教育関係者や市民の方々にも知っていただきたく、今回も入賞作品集として本小冊子を作成しました。この小冊子が日本語学習者の刺激となり、次回のエッセイ・コンテストにはより多くの参加者が得られることを期待したいと思います。

二〇〇九年三月

在ボストン日本国総領事
辻　優

審査員

桂子セイヤー　元ピーボディ・エセックス博物館東洋部助手
木俣洋一　講談社アメリカ上席副社長
森田喜代子　タフツ大学日本学科、日本語講師
進藤　康治　在ボストン日本国総領事館広報文化担当領事

謝意

講談社アメリカより本エッセイ・コンテスト入賞者への副賞として書籍を寄贈いただきました。ここに改めて御礼申し上げます。

入賞者　　Award Winners

上級レベル　Advanced Division

特別賞

ケニー・フリン　　コルビー大学
Kenneth Flynn　　Colby College

中級レベル　Intermediate Division

一位　1st Place

アンドリュー・ハーディガン　　コルビー大学
Andrew Hardigan　　Colby College

二位　2nd Place

アンドレア・ムイ　　ウエルスリー大学
Andrea Mui　　Wellesley College

三位　3rd Place

エドーシェ・ヒルパ　　ハーバード大学
Iddoshe Hirpa　　Harvard College

上級レベル特別賞

「日米のグリーン未来」

ケニー　フリン

私は日本とアメリカの環境問題に興味があります。毎年、二酸化炭素の排出に直接関係がある気候変動の問題は更に深刻になってきています。大気中で二酸化炭素が大きくなっている時に、温度が上がり、惑星が変わってきています。それによって、色々な動物の生息地を破壊したり農業を没落したりしています。たとえば、京都ではお寺の苔が大切な文化です。しかし、温度が上がっているので、苔は生きられません。これは国際的な問題です。

日本と米国は世界で一番、二酸化炭素を排出している国だし、日本と米国のほうが他の国より科学研究が発達しているので、気候変動の問題にこたえるような有効な解決策を打ち出してもらいたいです。たとえば、京都議定書について日本は２０５０年までに二酸化炭素の排出を８０％減らすつもりです。しかし、まだ米国・インド・中国は賛成していません。日本だけでは大変すぎます。環境調査をめぐって、日米間の友好関係が必要です。米国が率先垂範して賛成したら、中国・インドも賛成するはずです。

今、オバマ大統領が気候変動の問題に取りくみたいと思っているので、日本と米国は協力できます。協力するように、よく研究者が会ったり、早く研究書を日本語から英語に翻訳したり、相互研究をしたりしなくちゃいけません。しなかったら、気候変動の問題が早く解決できないし、惑星も助けられません。

日米は共にグリーン未来に次の世代を指導すべき国々です。

中級レベル一位

「日米関係と生物学の研究」

アンドリュー　ハーディガン

胚性幹細胞はすべての細胞の元になる種類の細胞で多くの病気の治療につながります。もし胚性幹細胞の研究者が首尾良く胚性幹細胞の変化を支配できたら、致死病状の患者の命を助けることができます。

しかし、これまで、胚性幹細胞の研究にはたくさんの問題がありました。胎児から胚性幹細胞を取ると後で胎児が死んでしまうからです。最近日本とアメリカで可能な解決策を発見しました。二つの研究チームがもう分化型の体細胞を胚性幹細胞に似た幹細胞に変換できました。このすばらしい発見は山中伸弥博士が率いる研究室とジェムズ・トンプサン博士が率いる研究室でされました。山中博士は京都大学に所属していて、トンプサン博士はウィスコンシン大学に所属しています。両方のチームがいろいろな体細胞を変換できる転写因子を探して、iPS 細胞と言われる新しい胚性幹細胞に似た細胞を見つけました。iPS 細胞と胚性幹細胞は実質的に同じですから、胚性幹細胞を使用せずに研究者は幹細胞研究ができるようになりました。

転写因子には lin28 と sox2 と nanog と klf4 と oct-3/4 と c-myc があって、初期胚としても重要です。山中博士の最初の iPS 実験はねずみを使ってしました。前に述べた転写因子を使って山中博士チームはねずみの繊維芽細胞から iPS 細胞をつくりました。ほかの転写因子を使うと、このねずみの iPS 細胞が新しい種類の体細胞になります。これを発見した後で、山中博士チームはヒトでこの実験を繰り返すのに本腰を入れ始めました。この調査はとても重要です。

現在、日本でもアメリカでも幹細胞を使ったほかの研究が始まっていますが、iPS 細胞を作る調査の方が大切だと思います。アメリカと日本の研究者が協力すれば、将来日米関係がよくなるし、もうすぐ新しい薬も命を助ける手術もできるでしょう。

中級レベル二位

日米の未来

アンドレア　ムイ

私が初めて日本人と交流したのは三年前の夏に横浜に留学した時だ。当時、アメリカを代表する留学生だったが、本当は香港出身の中国人だった。だから、制服を着たら普通の女子高生みたいだった。私はこのような異なる文化的背景があったので、他のアメリカの留学生と違った観点から日本が見られた。

日本では生活習慣の相違があっても、気になることはなかった。別世界にいるようだったが、環境には早く慣れた。でも、やはり気になったことは日本人との付き合い方だった。日本人の大人は私が日本人じゃないと分かると態度が変わった。それはサマーキャンプに行った時だった。私は風邪で熱があった。そして、消灯後も部屋でホストの兄弟が私を看護してくれた。厳しい学年主任が部屋の前を通った時私達がルールに従わずにまだ起きていたので、ひどくしかられた。私は「アメリカの留学生だから日本語があまり分かりません」と答えた。その時、学年主任の顔がサッと青ざめた。彼女は私に頭を下げて謝罪して二十分のマッサージしてくれた。私は何故彼女が急に優しくしてくれたんだろうと何度も考えた。彼女はアメリカに憧れる日本人のように、私を「アメリカ人」として見た。たぶん外国人の私といると落ち着かないので、私が偉い人のように接してくれたのだろう。私の気持ちは複雑だった。

私は留学中、友達と映画を見たり、温泉に入ったり、秘密を教えたりした。短い間にもお互いの純粋な友情を感じた。友達は私を外国人として扱わなかった。

昔の日米戦争や対立関係はまだ残り、例えば私の祖父母は今も日中戦争のことで、まだ日本人を許さない。でも、私みたいに留学を通して若い世代が外国人への偏見を忘れ、個人がお互いを理解したらいい気持ちで交流できる。私が横浜の高校で経験したように心を開いて付き合えたら必ず友好関係が築ける。私は日米の未来は今良い方向に向かっていると思う。

中級レベル三位

日米の未来

エドーシェ　ヒルパ

我々は日米間の友好関係を維持しなければならないという考え方が多いかもしれないが、元々日米間の友好関係というのは、ちょっと不平等な関係で、反対した人がいると言えるだろう。アメリカと日本の関係は、明治維新の時から、長くて、複雑である。特に、第二次世界大戦の後、アメリカに日本人は占領統治を苦しみ、色々な事が変わってしまったのである。聞く人によっては、アメリカのおかげでいい事もアメリカのせいで悪い事もあったと言うだろう。例えば、一方で女性が男性と同じように選挙できるようになったが、日米安全保障条約に反対している人が多くて、全学連と全共闘という団体が作られて、少し怖い時代であった。

こういう団体を作った理由は何だろう。１９９７年に柄谷行人という哲学者は「美学の紅葉：オリエンタリズム以後」という掲載で日本人と西洋人の関係についてこう書いた：「すなわち、彼が愛するのは美的日本であり、表彰としての日本であって、出来れば日本人いつまでもそこにとどまっていてほしいのだ。日本人が西洋化された姿など見たくもないし、西洋の言葉（だと彼が信じる）で語ったりする事など聞きたくもない。一口にいえば、それは美的な態度である。」これはオリエンタリズムという思想である。つまり、柄谷によると、西洋人は日本人を本当に平等立場迎えられないので、日米間の関係は理想な関係じゃないらしい。柄谷行人のような人がいて、オリエンタリズムの効果を考えるからこそ、理想な日米間の友好関係ができていくのである。だから、平等な関係になるために西洋の思想は変わらなければならない。

もちろん、現代の日米間の関係は第二次世界大戦の後での関係と同じだというわけではないが、まだ全くに平等ではない。日米が助け合う事ができるように、完璧に平等な関係が必要だと思う。そうすると、もっと、もっと、いい未来になるだろうと信じている。

本冊子の電子データ(word)は以下のアドレスでご参照下さい。
http://www.boston.us.emb-japan.go.jp/ja/essay2009.doc